慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	白井厚君学位授与報告
Sub Title	
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.12 (1967. 12) ,p.1513(101)- 1518(106)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19671201-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あろう。

筆者はさらに中国の人民公社においてもソビエトのコルホーズにおけると同じ理由で差額地代の成立をみとめ、差額地代はいずれのばあいにおいても単一の全人民的所有の確立をもってはじめて止揚されるとのべている。

本論文のすぐれた点を要約してしるせば、つぎのとおりである。

一　社会主義経済学の歴史は第一章の部分でしるしたようにきわめてあたらしく、マルクス経済学のなかでももっとも困難な研究分野である。同一の問題についてさまざまな見解が存在し、個々の問題について一般的に権威ある定説というものが成立していない。こういう分野では、なによりも内外のさまざまな見解の検討をとおして問題の所在をあきらかにし、これをふまえて学説を自ら体系化してゆくことが必要であるが、筆者の研究態度はまさにこれに該当し、この分野にもっともふさわしい研究態度であるといわなければならない。

二　また社会主義経済学の対象である社会主義経済は、時々刻々動きつつあるものであるところからも、研究の困難がみとめられるが、このような分野では、事実そのものの認識が研究者にとってまず必要とされる。この点においても筆者は社会主義経済の現実より出発し、これと関連づけて理論を研究しており、本報告ではいちいち詳細に言及しえなかったが、現状分析のおこなわれている第四・五・六章においてはきわめて豊富な資料が利用されている。もっとも筆者によって利用されている資料について検討の余地が全然ないとはいえないであろう。

またつぎの諸点はさらに解明を要するであろう。第三章において筆者によって高く評価されている、タルノフスキー、ポヴィキン、ギンジンの論文「ロシアにおける国家独占資本主義――社会主義革命の諸前提にかんする問題によせて」は、ロシアにおいて革命以前に国家独占資本主義が存在したとみているが、これについてはなお検討が必要とされるであろう。第七章におけるのこされた問題として、ゾビエトでなぜ地代論争が戦前戦後に二回にわたっておこなわれたかという理由の説明と差額地代第二形態のいっそうたちいった研究とがあげられるであろう。

しかしこれらの諸点は、今後の筆者の研究の進展によって充足されうべきものである。本研究が中国および一般に社会主義経済の研究にとって寄与するところきわめて大であると考えられる。よって本研究は経済学博士の学位をうけるに十分に値するものと考えられる。

論文審査担当者　主査　遊部久蔵
副査　小池基之
石川忠雄

白井厚君学位授与報告

報告番号　甲第一七四号
学位の種類　経済学博士
授与の年月日　昭和四二年九月二二日
学位論文題名　「ウィリアム・ゴドウィン研究」

「ウィリアム・ゴドウィン研究」論文要旨

白井厚

内容の要旨

この論文の目的は、第一に、戦後活発となった諸外国のゴドウィン研究を紹介し、ゴドウィンの生涯、「政治的正義」、「研究者」などの主著の検討、リカードゥ派社会主義、オウエン、シェリ、ウルスタンクラーフトなどとの影響関係、ロマン主義文学や教育史上の意義などをも明らかにすることにある。

第二に、彼の思想の本質、およびそれがイギリス社会経済史の背景の中に成立する根拠を明らかにし、その意義と限界を客観的に評価することである。そのために、先ず急進主義思想を、資本家型、小商品生産者型、反商品生産者型の三つに分類し、独立派、水平派、ディガーズ、ロック、ヒューム、プリーストリ、プライス、ペインらの思想を分析して、それぞれの特徴を明らかにし、ゴドウィンの思想をもって、小生産者的性格を持ちながらも、ディガーズを基点とする急進主義の第三の型に属し、しかも啓蒙思想によってその復古性を克服したものと位置づけた。

そして、〝イギリスにおけるフランス革命〟と呼ばれる時代を、フランス革命、労働運動、バーク、マルサスなどとの関連において考察、ゴドウィンの思想を、この時代精神の極限形態であり、戦闘的な功利主義の基礎に立って、ブルジョア的社会観に反撥し、理性による個人の主体的変革を通じて、アナキズムを構想し、民主主義の擁護と克服という課題を提起、共産主義に到達したと評価した。

このような、近代的個人主義の徹底と厳しい社会批判は、政治を財産制度から把握して、蓄積財産制度における人間疎外を攻撃せしめたが、これは、トムスンの「富の分配原理研究」、ホジスキンの「労働擁護論」、そしてオウエンの共産主義に大きな影響を及ぼした。特にオウエンとの関係については、オウエンのユートウピアはゴドウィンに最も近く、ゴドウィン的な自由、平等、共産の社会を、資本家としての経験から一つの企業として資本主義的に設計して見せたものが、オウエンの協同村であると考える。

この論文の第三の目的は、現代および将来の諸問題を考えるために、積極的にゴドウィンの思想を再評価し、新しい視角をもってこれから多くの素材を学びとることである。ゴドウィン的な個人主義は、一方においてモリス、ショウ、ワイルド、ラスキなどイギリスの社会主義の伝統の中を流れているが、他方においては、「ゴータ

綱領批判」に現われたマルクスのユートウピア、特にいわゆる共産主義の第二段階は、人びとが欲望に応じて消費し、分業における個々人の奴隷的依存、肉体労働と精神労働の対立が消滅し、人びとの素質が全面的に発達し、全体の利益のために働くなど、ゴドウィンのヴィジョンを継承するものであった。今日、社会変革の方法についてゴドウィンから学ぶところは少いけれども、資本主義、および大衆社会状況下の疎外克服のために、また未来社会の展望のために、なお豊かな素材がゴドウィンの中に見出されよう。

審査報告要旨

本論文の構成はつぎのとおりである。

第一章　序論
第二章　その生涯と著作
第三章　急進主義と反動体制
第四章　『政治的正義』研究
第五章　『研究者』研究
第六章　ゴドウィンの影響
第七章　むすび
第八章　文献目録

さらに補論として、「日本におけるゴドウィン研究史」、「最近のゴドウィン研究文献」および英文（On William Godwin）が加えられている。

第一章　序論　ウィリアム・ゴドウィン（一七五六―一八三六）は――著者によれば――、「近代無政府共産主義の最初の理論家」であり、マルサスに人口論執筆の動機をあたえ、イギリス・ロマン派詩人たちに霊感をあたえ、その資本主義批判はリカード派社会主義者やオウエンによって継承されるなど、その影響はきわめて大きい。本論文は我国において通常とかくマルサス人口論との関係でのみひきあいにだされてきたにとどまるゴドウィンをこのようなひろい視野のなかであつかい、さらに著者独自の現代的観点から多分にゴドウィンの思想にたいする共感をもってしるされているのが特徴的である。

そこで本書の第一の目的は、戦後活発になった諸外国のゴドウィン研究を参照しつつ、その生涯、時代、主著などをその問題点とともに紹介することである。本書の第二の目的は、「ゴドウィンの人間、著作、時代、影響を通じて、さらにかれの思想の本質およびそれがイギリス社会経済史の背景の中に成立する根拠を明らかにし、その意義と限界を客観的に評価することである。」本書の第三の目的は、現代および将来の諸問題を考察する上で、積極的にゴドウィンの思想を再評価し、新しい視角をもってこれから多くの素材をまなびとることである。

第二章　その生涯と著作　ゴドウィンの生涯において社会的に、また思想史の上でもっとも重要な時期は、主著『政治的正義』（"An Enquiry Concerning Political Justice"）の刊行（一七九三年）を中心とする数年であるが、主著をよりよく理解するために、またかれの思想の変化と「時代の精神」との対応関係を確定するために、かれらの生涯、思想の形成、変化発展がつぎの五つの時期にわけて説明されている。

一、生れてから牧師をやめるまで（一七五六―一七八三年、二七歳まで）……非国教派神学から理神論・唯物論へ。

二、牧師をやめてから『政治的正義』を出版するまで（一七八三―一七九三年、三七歳まで）……宗教を脱却し、『政治的正義』の思想を形成。フランス革命の影響が大きい。

三、『政治的正義』以後、妻のウルスタンクラーフトの死まで（一七九三―一七九七年、四一歳まで）……名声に輝く絶頂期。『政治的正義』の思想をさらに発展。

四、ウルスタンクラーフトの死から再婚まで（一七九八―一八〇一年、四五歳まで）……悪評の時代。急進主義運動にたいする弾圧、マルサスの『人口の原理』の出現があり、亡妻の追憶文は激しい非難を招いた。

五、再婚から死まで（一八〇一―一八三六年、八〇歳まで）……忘却の時代。経済的に困窮し出版を始めるが、『大英帝国史』（"History of the Commonwealth of England" 1824-28.）、『人間観』（"Thoughts on Man", 1831.）などを執筆し、シェリなどと交際をつづけた。

この章では最近のゴドウィン伝（Woodcock, 1946. Fleisher, 1951.）その他の資料を基礎にして要領よくかかれているが、やや個人の生活と直接的な生活環境との平面的叙述におわった感がある。

第三章、急進主義と反動体制、中には、つぎの三節、(1)急進主義の歩み、(2)イギリスにおけるフランス革命、(3)T・R・マルサスとの人口論争がふくまれている。

著者はゴドウィンの社会変革思想史上の位置づけをおこなうためにブルジョア革命の時期における急進主義といわれるものを三つの原型、すなわち㈠独立派（産業資本およびそれに成長する独立生産者。＝資本家型）、㈡水平派（没落過程にある小生産者。＝小商品生産者型）㈢ディガーズ（貧農。＝反商品生産者型）に分類し、そのうえでゴドウィンの思想がどのグループに「対応」するかを検討し、かれの見解は一面では水平派の流れをくむが、それ以上にはるかにディガーズに対応しているとみられている。というのは、ゴドウィンの賃労働の否定、反封建、反資本主義的性格、政治、宗教における権力批判、政府と私有財産とを結びつけて批判する方法、貪慾や悲惨などを外的な束縛から説明する考え方、富の基礎を労働とする見方、生産を中心とした共産主義、理性の支配、必要にもとづく消費、教区単位の民主主義などという見解は、ディガーズに対応しているからであるという。

さらに当時、イギリスにおけるフランス革命（一説によれば一七八九―一八二二年）の時代の思想界が政治思想の観点で四派すなわち㈠トーリー党、㈡ウィッグ党、㈢哲学的急進派、㈣急進派に分けられ、ここでもゴドウィンは㈣の中のディガーズの系譜に属さしめられている。

マルサス批判の部分においては、人口問題についてのマルサス対ゴドウィン（新マルサス主義の先駆プレイスをもふくめて）の対立関係が年代を追ってかなりくわしくあとづけられているが、むしろ当

時の人口（＝貧困）問題（救貧法をもふくめて）、そのものの経済学的解明が要求されるところである。そのような観点からこそ、双方の論戦も根底的に明瞭にされるであろう。

第四章、『政治的正義』研究は、つぎの六節、すなわち(1)各版の差について、(2)思想の背景――自然法から功利主義へ、(3)理性的人間観から感性的人間観へ、(4)『政治的正義』における道徳哲学、(5)無政府主義、(6)『政治的正義』における資本主義批判と経済思想をふくむ。

著者はまず初版より再版（一七九六年）、とくに第三版（一七九八年）にいたる、『政治的正義』各版の比較対照をおこない、のちの版における功利主義の強化、感情の要素の重要視、権利や財産の安全の承認などの出現がゴドウィンの思想自体の変化というよりもその重点のおきどころの変化であるとみなし、また変化の理由を解明している。

さらにゴドウィンの体系の思想史的背景としての自然法思想から功利主義へという転換が社会を構成する人間観の変化をもたらすことが解明されている。ここでゴドウィンの思想がきわめて道徳的で理性的である理由がカルヴィニズム、プラトニズムの影響であるというよりも産業革命の過程で没落しつつある独立小生産者たちという経済的な階級的な基礎から理解されるべきであるとしるされている。またゴドウィンが一面では功利主義者でありながら、他面功利主義に対立するロマン派の理論の一般的基礎を提供したということ、かれが功利主義者の中でロマン派との結合の頂点に立つということがのべられている。

著者はゴドウィンの道徳哲学が今日の人間状況の解明に役立つ面を多くもっているとみなし、知識社会学との対比（モンロウ）も可能であり、また実存主義、E・フロム、B・ラッセルなどの思想と共通するものがあるという。こういう点がはじめに指摘した、ゴドウィンの思想への著者の共感の一源泉をなしていることは、いうまでもない。また著者はゴドウィンの政治思想のなかに天才的洞察をみとめ、人間変革の期待を直接民主政にもとめ、やがて権力の消滅をのぞむ見解は、私有財産の批判とあいまって、ディガーズ――ルソー――ゴドウィンを経てマルクス主義における民主主義そのものの揚棄という思想につながるとみられている。

『政治的正義』における資本主義批判と経済思想との卓越した点である、政治制度を財産制度の上部構造として、逆にいえば、財産制度を政治制度の下部構造（「キー・ストーン」）として把握しているということは、今日における小ブルジョア的自由主義の系譜（無政府主義者、実存主義者等々）よりかれがすぐれていることを示す、また、ゴドウィンの私有財産批判が当時におけるほとんど唯一の資本主義の体制的批判であったということは、かれをしてペインやロンドン通信協会の人々、またスペンスよりも卓越させている。

ゴドウィンは分業による人間の専門化に反対し、機械の無限の進歩、理性の発展による全体的人間像を賞揚しており、その点でゴドウィンの小生産者的意識が示されていると著者はいう。スペンスのようにゴドウィンは古い農村共同体に郷愁を示すようなこともなかったが、その理由として市民社会の成立を示す原子論的社会観、功利主義の影響下にかれがあるということがあげられている。しかしこれでは十分な説明にならないであろう。つづけて労働運動にたいする功利主義の貢献者として、通説のようにベンサマイトではなくてゴドウィンが著者によってあげられている。

第五章、『研究者』（"The Enquirer: Reflections on Education, Manners, and Literatures" 1797.）の研究においては、この第二の主著でのゴドウィンの教育思想および資本主義批判と経済思想とが論じられている。まず教育思想についてみると、『研究者』が『政治的正義』、とくに初版とことなる点は、後者では社会の変革（人間の変革）は理性によっておこなわれるべきものであり、教育は副次的役割しかあたえられていなかったが、その後しだいに理性とならんで感情が重視され功利主義的傾向がつよまるようになり、『教育者』では積極的に教育論が展開されているのは、このようなかれの思想の変化によるものであるとみられている。ゴドウィンの教育思想の特徴は教育が社会変革の一環として考えられ、(a)徹底的な自由主義、精神的独立の重要視、権力の排除、(b)理性への信頼、(c)平等主義に立脚している点にうかがわれる。

つぎに『研究者』における資本主義批判と経済思想とについてみる。『研究者』には『政治的正義』におけるような財産論の体系はないが、その第二部は主として社会問題をあつかっており、前著にみられなかったいくつかの経済思想として、(イ)富と貧困とについて論じたさいに剰余労働がとりあげられていること、(ロ)マルサス父子の論争の契機となった貪慾と浪費とについての見解――正義の原理にとって貪慾の方が浪費よりもよりちかいという見解――にうかがわれるオウエン、サンーシモン、フーリエとことなる反産業主義思想、(ハ)富は労働であるという見解――これがのちにリカード派社会主義者によって継承されて、資本の重要性の主張や物神崇拝にたいするアンティ・テーゼとなった。――があげられている。

第六章、ゴドウィンの影響では、ゴドウィンの思想のリカード派社会主義者への影響とオウエンへの影響とがのべられている。

ゴドウィンと空想的社会主義者（オウエン、サンーシモン、フーリエ）、リカード派社会主義者との関係についてみると、ゴドウィンは空想的社会主義者と対立しながらむしろリカード派社会主義者により近い面がある。すなわちゴドウィンは産業主義批判という点では、一種の産業主義であった空想的社会主義者と対立し、後者のブルジョア的性格にたいして独立小生産者的立場に立つ。ゴドウィンはリカード派社会主義者と独立小生産者的立場ということで共通なものをもつが、さらに労働の重視という点でも親近性をもつ。しかしゴドウィンとリカード派社会主義者と相異なる点もみのがされてはいない。(イ)ゴドウィンの体系は一八世紀にほぼ完結したのに、リカード派社会主義者の活動した時期は一八二〇年代であり、当然双方の間に問題意識の上で大きなズレが生じる。すなわちゴドウィンは大衆行動を嫌悪し、リカード派社会主義者は労働運動と結びつき分配問題を中心とした経済理論より出発し、資本の要求を攻撃目標とした。(ロ)リカード派社会主義者は私有財産を神聖視し資本主義的な搾

取には反対するが、小商品生産者的な意識がつよく商品生産を窮極的なものとみなしたが、ゴドウィンは市民社会の基礎にある商品交換を資本流通もろとも排除しようとした。このちがいは、けっきょく、ゴドウィンは急進主義の第三の型、ディガーズの系譜に属するのに、リカード派社会主義者は第二の型（水平派）の系譜に属するという相違にもとづくとされている。だがゴドウィンの見解における批判的要素は、科学的社会主義の抬頭するまでのあいだ空想的社会主義、リカード派社会主義、ロマン主義の展開にきわめて価値ある素材を提供することとなったということで、ここでは個別的に、トムスン、ホジスキン、オウエンとゴドウィンとの関係が論じられている。とくにオウエンについては、性格形成原理（環境論）、功利主義、教育論、ユートウピア観にかんしてゴドウィンとの比較が詳論されている。

全体として著者の社会思想史の方法上の特徴は、社会思想史の流れが個々のグループや個人間の系譜の追求と確定というかたちでつかまれていることであるが、それが時代の下部構造や大衆の運動との関係で十分ほりさげておこなわれていないといううらみがある。社会思想史においては思想の系譜の確定が単に思想の世界そのもののなかでのみおこなわれるという抽象化をさけるためには、なによりも下部構造の分析による裏付けが——本書の序論のなかで、本書の目的の一つとしてゴドウィンの思想が「イギリス社会経済史の背景の中に成立する根拠を明らかにし」とのべられているように——必要であろう。もちろん本書中にこういう努力が全然はらわれていないというのではないが、十分説得的な効果をうむまでにおこなわれていないことは事実である。そのためにゴドウィンの思想の担い手としてしばしば著者によって指示されている独立小生産者というものも単に抽象的な言葉としてとどまっているきらいがあるし、ディガーズとゴドウィンとを一つの系譜にむすびつける著者の創見も十分説得的であるとはいえないであろう。

このような問題がなおあるにしても、本書がゴドウィンに関する研究として、我国ではじめて本格的になされたというだけではなく、国際的な研究成果に十分立脚しているという意味で、きわめて高い価値を有すると考えられる。主論文として提出された本書、ならびに副論文として提出された『オウエン』および『「空想より科学へ」講義』——ちなみに副論文の二著には主論文の主題を補足するいくつかの研究がなされている。すなわち前者においては、主論文中の「オウエンとゴドウィン」の主題についてオウエンの側の研究がなされており、後者においては主論文中でしばしばゴドウィンが対比された空想的社会主義者についての説明がなされている。——より判断して、著者は経済学博士の学位に十分値するものであると考える。

論文審査担当者　主査　寺尾琢磨
副査　平井新
遊部久蔵